

「部落問題に関する意識調査」における自由記述の特徴

近畿大学 非常勤講師 谷川 雅彦

「部落問題に関する意識調査」の結果をふまえ、「問 23」の「部落問題（同和問題）について、自由に意見をお書き下さい」という自由記述の回答についてその特徴を考察してみた。

意識調査の回答者数は 1,689 人で、「問 23」の自由記述については 588 人の学生が回答した。

[1] 自由記述に見る「寝た子を起こすな論」についての特徴

本年は内閣同和对策審議会答申（同対審答申）が出されて 50 年という年にあたる。同対審答申は、部落差別の存在を認知し、そっとしておけば差別はなくなるという「寝た子を起こすな論」を一蹴、部落差別が取り組めば解決できる社会問題であることを明らかにした。

あれから半世紀の時が流れたのだが、意識調査の結果は同対審答申が否定した「寝た子を起こすな論」が学生達の間にも根強く存在している事実を明らかにした。

「同和問題や差別があることを口に出さないで、そっとしておけばよい（自然に差別はなくなる）」という考え方について、「非常に効果的」が 14.4%、「やや効果的」が 24.2%と「効果的」と考える意見が 38.6%と 3 人に 1 人の学生がこの考え方を支持していた。2009 年に近畿大学で実施された同様の調査（「重要だと思う」と回答した学生が 13.0%）と比較すると約 3 倍に増えている。

自由記述に回答した 588 人のうち「(4) 同和問題や差別があることを口に出さないで、そっとしておけばよい（自然に差別はなくなる）」と同趣旨の回答をした学生は 36 人いた。

学生の「寝た子を起こすな論」の特徴は、「その言葉を知らなければ差別自体もなくなるのではないか」「何もしない方が差別、同和地区という概念そのものがなくなるのではと思います」「教えること自体に反対である」「差別はほっておけばなくなることだと思います。取りたてて問題にせず学校でも教えないことが重要だと思います」「教育しなければ部落差別はなくなると思います」といった、知らないことには差別することもできないので教えなければいいという考え方である。

もう一つの特徴は、「中途半端に扱おうと私のような新たな差別者を生む。だから何もせず、差別観の強い世代が死ぬのを待つのがよい」「正直、高校の部落問題の授業まで知らなかったのに、その授業のせいで意識するようになったので授業はいらないと思う」「この授業をきっかけに逆に部落差別というものを意識してしまい、逆効果だと思った」といった自分自身が部落問題学習を受けた経験が逆に自分の差別意識や偏見を生み出したという自らの体験から「そっとしておくほうがよい」と述べている回答である。

今回の調査では学生の部落問題の学習経験、とりわけ小中学校での学習経験が減少している傾向があることが明らかになっている（これまで学校で同和教育・部落問題についての学習を「受けたことがない」「覚えていない」の合計は 42.7%）が、部落問題に関する情報は学校以外の場で学生達に入ってきている。「父母など家族から」が 19.2%、「インターネットなど」が 7.0%などである。「寝た子」は起こされているのである。自由記述の回答を見ると「母が同和地区のことを差別的に話」していた。「家の近くに同和地区があり、親にあまり良いところではないから近づくなと

言われました」「私は父から部落問題を教えてもらいましたが、差別的な発言が多く、かかわることも父は良しとしません」「親が近所の部落に対して良いことを言っていない」「家族にやっぱ部落の人とかは結婚しない方がいいよといわれて」「話せることじゃないし誰が同和地区の人がいるかわからないから口に出すなと言われてきた」など、「寝た子」は間違っただけで起こされていることがわかる。

学校で部落問題学習を実施することだけでなく、学習を受けた子ども達が部落問題学習のねらいとは逆に「そっとしておいたほうがいい」と思ってしまう結果が生まれていることをふまえ、「寝た子を起こすな論」がいかに誤っているかを正しく伝えることが重要であるといえる。

[2] 自由記述に見る部落問題解決への展望についての特徴

部落差別は近い将来なくすることができるかという質問に、「完全になくすることができる」5.9%、「かなりなくすることができる」30.3%に対して、「なくすことはむづかしい」と回答した学生は60.9%となっている。「そっとしておけばなくなる」という「寝た子を起こすな論」とは逆に、「どんなことをしても差別はなくなる」という意見も根強い。自由記述の回答においても「寝た子を起こすな論」よりも多い52人が「部落差別をなくすことはむづかしい」と回答していた。

「部落差別をなくすことはむづかしい」という回答にも二つの傾向があった。第一の傾向は、「部落による差別をなくすことは非常に難しいが、なくす努力をやめてはいけなと思う」「完全になくなることは不可能だが、努力次第では良い方向には向かうと思う」「完全に無くなるのは難しいと思うが少しずつなくなれば良いと思う。また自分は中学、高校で差別について学習したことから、様々なことを知ることができたので、学校教育でたくさん取り入れるべきだと思う」「部落問題は江戸時代から続いている今さら何らかの行動を起こしたり制度を作ったとしても簡単にはなくなる。しかし、何かの対応をすべきだと思う」「将来的になくせるものではないけど、なくせるように日本全体が努力すべき」といった部落差別の現状認識は厳しいが取り組みをやめてはいけなという意見である。

もう一つの傾向は、「差別というのは人の心から生まれるもので、人間の性格は十人十色であるので、差別という考えがこの世から消えることはないと思う」「人を差別、区別することは人間の深層心理であり、無くすことはぜったいに不可能である」「部落問題が消えることはないと思う。なぜなら、私たちは人間であるからだ」「どうせ人間は腐っている下等動物だから、差別なんてなくなるならない」「昔ながらの差別はなくなるしないし、人は差別をしないと生きていけないと思う」「差別はいけななことだとわかっているものの、日本から差別はなくなるしない」「差別はなくなるしないものだ」とこの授業を受けて思いました」「差別は絶対なくなるしないと思う。程度は違うものの差別をしたことがない人間を僕は自分自身を含めて誰一人見たことはない」といった部落問題の解決に取り組んでも差別はなくなるしないという意見である。

部落差別の現実が厳しいという現状認識は共通する部分が多いが、ではどうするのかという点で両者の意見はまったく違ってくる。同対審答申が出された当時の意識（地区内外の婚姻状況など）が確実に変わってきていることなど差別が解消されてきているという実例、国連や諸外国の差別解消にむけた取り組み、障害者差別解消法や被差別当事者の運動、行政、企業、宗教者などの取り組みの紹介など差別解消の展望を共有していくような取り組みが求められるといえる。

[3] 「気にしていない」「気にしすぎ」という回答

何が差別にあたるのかを考えると、差別した（加害）側、差別された（被害）側でそのとらえ方は大きく異なる場合が多い。自由記述の回答を見ると「（私は）気にしていない・気にしない」という意見や「（部落出身者の側が）気にしすぎ・気にしない方がいい」という意見がある。

こうした自由記述の特徴として「最近の若い人は部落問題を気にしていないと思う」「今の若い子たちは、あまり部落とよばれることに興味はないと思います。もっと年配の方の意思を変えるべきだと思います」「まったく気にしたことがなかったし、これからも全く気にしません。もう部落だということで差別する人も非常に少なくなっていると思います」「若い世代では、どこが同和地区かあまり知らないし、気にしていない人が多いと思う」「正直、私たち以下の世代では、ほとんど気にしている人はいないと思う」「今の世の中ではそんなことを気にする人（若い人）はいないとおもう」といった回答に見られるように世間では、とりわけ若い世代では部落差別はなくなってきており、部落を気にしていない、気にする人が少なくなっているという意見である。

また、もう一つの特徴として「特に気にすることなくつきあっていく」「そういうことはあまり気にしたことがないので正直わからないです」「日常で自分自身が部落問題について気にすることはこれから先もないと思います」「あまり気にしたことはない」「僕はあまり気にしないです」「堂々としていればいいと思う。同じ人間なのだから」「部落について差別などしないが、部落出身の人間は、そんな昔のことをいつまでも気にしてはいけなと思う」など、自分は気にしていない、部落出身者の側が気にしすぎているのではないかという意見である。

しかし、「私はあまりよくわかりませんが、父は気にしているみたいです」「自分的にはあまり気にしないが両親がそういうことをすごく気にするので」といった回答にも見られるように現実には「気にしない」人たちがばかりではない。結婚したいと思う人が被差別部落出身だと分かった場合、どんな態度をとるかという質問と、結婚したい相手が部落出身者だと分かったときに家族がどのような態度をとるかという質問とのクロス集計結果から「家族が反対すると思われる」グループが結婚を「考え直す」という割合が73.2%にのぼることが明らかにされている（「学生の部落問題に関する意識の実態」（奥田均））。部落差別の現実には「気にしない」「気にしすぎ」といった気持ちの持ち様の問題ではない。

[4] 「はじめて知った」という回答

被差別部落、同和地区、部落問題、同和問題、部落差別という問題を近畿大学に入学するまで「知らなかった」という学生は、31.3%、約3人に1人だった。自由記述においても24人が「今まで部落問題というのを知らなかった」「同和地区という言葉は初めて聞きました」「同和問題という言葉は今日初めて聞きました」「今まで聞いたことがなかった」「私は今まで一度も部落問題について教育されたことも、ましてや同和地区という言葉すら知りませんでした」などと回答した。

「はじめて知った」「知らなかった」という回答の特徴として、「今日に至るまでの人生において、一度も耳にしたことがない。私も知らなかったし、友だちも知らなかった。知らなければ、差別は起きないし、気にすることはない。差別はしてはいけなと教わっているし、もう次の世代には同和問題とかそういう言葉がなくなっているではないか」「私自身、そういった問題があることを知らなかったので、今まで普通に接していた友人に気をつけて話などをするようになってしまい、その問題について知らない方が仲良くできていたなと思ったことがあります」といった「知らなけ

ればよかった」「教えない方がいい」という意見である。

もう一つの特徴としては、「私の住んでいる地域では部落問題というものがあまりなく、全然知らなかった。私が思うに子どもなどは大人の影響が大きいと感じるので、学校などでしっかりと部落問題について学習すればいいと思う」「部落問題について、自分は全然知らずに生活していました。自分自身の家庭が特に貧しい訳でもなく、周りの友人たちにもそのような者はいなかったので、最近まで全く気にしていませんでした。多分、中学、高校時代にもそのような問題についての取り組みはなかったと思います。だからこそ今回のアンケートには少し驚きました。そのような問題があるという事実をもっと人々に知らせるべきだと思う」「初めて同和問題という言葉を知ったので、詳しく調べてみようと思う」「同和問題というのは正直初めて聞いたので問 22 まで調べながら進めてきました。一部の地域の人々が島国根性のようなものを持ち、他の地域の人々を冷たい目で見るといように捉えましたが恐らく間違っていると思います。まずはもっと調べて行って、自分なりの意見を持とうと思います」「初めて同和問題という言葉を知ったので、詳しく調べてみようと思う」といった「もっと知りたい」「正しく教えるべき」という意見である。

また、「同和地区という言葉を知った。そして同和地区について知らないし、身近にそんな地域がないと思っているので、具体的に親身になって考えるのが難しかった。差別はよくないことだが、人間が生きる以上完全になくなりほしくないと思う」「同和問題という言葉を知った。差別とは完全になくすることができないと思う」など少数であるが部落問題を初めて知って「差別をなくすることはできない」と回答した学生がいた。

[5] 「よくわからない」という回答

自由記述の回答を見ていて目立ったのが「よくわからない」という回答だった。「よくわからない」という意見の特徴の一つは、「部落問題自体耳にしたのがはじめてだったので、あまりわからなかった」「正直、同和など地区で差別があることを知らなかった。同和地区という言葉の意味さえ分からなかったので、アンケートに答えていることが、自分の思っていることと合っているのか、違うのか正直分からない」「部落問題や同和問題ははじめて聞いたのでまったくわからないというのが本音です」「この問題について知らなかったので何とも言えません」など、アンケートではじめて部落問題を知ったので「よくわからない」という回答である。

二つ目の特徴は、「今まで部落問題について学校で学んできたけど、正直言ってもまだによく分からない」「学校で習ったけど正直なんで出身地区で差別がおこるのかは理解できません」など、同和教育・部落問題の学習経験があるが「よくわからない」という回答である。

三つ目の特徴は、「身近でそういうのに遭遇したことないから、よくわからないのが正直な感想です」「今までそういう人達と接することがなかったから、よくわからない」「自分の目で部落問題を見たことがないので、正直本当にその問題が起こっているのかさえ自分には分からない」「道民なので部落についてよくわからないのですが、僕の住んでいるところではアイヌだから差別がある、などということはなかったです。なので現代で部落だから差別されるというのがイマイチわかりません」「私にとって身近なことではないのでよく分かりませんが」「同和地区の人と呼ばれる人たちとの関わりがないので詳しいことが分からず何とも言えない」「部落問題は、自分にとって身近ではないから、わからないことが多い」「現在部落問題といわれても正直ピンとこないというのが正直なところですよ」など、部落問題が具体的にイメージできていないために「よくわからない」と

いう回答である。

「まず部落問題の本質を知り、何が問題であるのかを理解しなければいけない」「まずは知ることが大切と思うので、きっかけが欲しい」「同和問題がなにか分からないので、授業などで詳しく説明するような機会をとってほしい」といった回答など、部落問題が「よくわからない」学生達が部落問題を豊かに学ぶ機会、それも部落問題が「ピンとくる」ような部落出身者との交流、被差別部落のフィールドワークなど部落内外の豊かな交流の機会の提供が求められている。意識調査の結果でも「同和地区の人との関わりはまったくない」と回答した学生が73.1%もいる。

[6]「優遇されている」「バラバラに住む」「部落をなくす」という回答

意識調査の結果、同和地区はいまでも行政から特別な扱いを受け、優遇されているというイメージに肯定的な意見（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計）を持つ学生は19.3%と約5人に1人であった。

自由記述には「今生きている人の祖先がどれほど苦しめられてきたかはわからないが、今生きている人は昔から差別があるからと逆に、家や仕事や、プールなど、優遇されすぎと思います」「国の補助があるから周りが特別扱いするので、補助などもなくすべき」「部落差別はいけないことであるが、政府が生活支援のためにお金を払いすぎるのはよくないと思う」「部落への優遇を受けるために部落へ住んでいる人もいる」「小学生の時、同じ市内に部落があり、その小学校だけ給食にケーキが出ているらしいという事を聞きました。これは逆差別だと親は言っていました」といった行政からの優遇政策への批判があった。

また、「そもそも、優遇こそが差別を生む原因であると人間は気付くべきだ。それがあからこそ、人間の中に差別を肯定するものがあらわれる」「優遇されたくて差別されていますアピールをしているように思う。優遇を全て絶って、部落など初めからなかったことにすれば自然に忘れられていくのではないかと思う」といった行政からの優遇が部落差別を生み出しているという意見もあった。

2002年3月末をもって同和対策事業の根拠となった国の法律（「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」）が失効して13年が経過している。全国を牽引する同和行政を進めてきた大阪においても同和地区に建設された公営住宅等の公的施設もすべての市民が対象となっている。同和地区や同和地区住民が「行政から特別な扱いを受け優遇されている」という誤解が差別や偏見を生む要因になっているのであれば行政自らがこうした事実が一切無いことを明確にする必要がある。

京都朝鮮学校襲撃事件やヘイトデモに見られるヘイトスピーチが繰り返されている。「行政から特別な扱いを受け優遇されている」という誤解や偏見は、存在しない「在日特権」なるものをつくりだし、在日朝鮮人への差別・偏見を扇動するヘイトスピーチへとエスカレートさせているように被差別部落出身者への差別扇動を生じさせる危険性を孕んでいる。

「同和地区の人々がかたまって住まないで、分散して住むようにする」ことが同和問題を解決するために効果的（「非常に効果的」「やや効果的」の合計）だと考える学生は39.7%であった。自由記述の回答でも「分散して住むのが一番効果的だろう」「バラバラに住み、なるべく同和の人々と会わないようにする」「部落出身の人は自分の偏見であるかもしれないがかたまって、住んでいるイメージがある。それが本当なら、問22の(5)（部落分散論）の方法がNEXT STEPSに進む

ためにも、効果的ではないだろうか」といった意見があった。

固まって住んでいるから差別される、バラバラに住めば差別はなくなるといういわゆる「部落分散論」である。「差別という考えがこの世から消えることはないと思う。部落問題（同和問題）という言葉自体を失くしてしまう方が効果的ではないかと考える」「そもそも部落など同和などの言葉をなくせばよいと思う」という回答もあり、「部落問題を解決するには根本的な意識を変えるのではなく、部落というものを消しさが一番効果的だと思う」という回答もあった。

[7] 「差別はない」という回答と差別意識を持つ学生の回答

「今、部落問題があるとは思えない。自分は部落地区に住んでいたが差別された経験が一度もない」「正直部落問題は現代の若者にとっては本当に関係のない話なぐらい差別はないと思う」「今は住所じゃわからなし、多くの人が引っ越しとかしているので地区に関する差別は減ってきていると思います」「部落問題は年々なくなってきているのではないかとと思う」「部落問題は忘れられつつあるし、それで差別する人はもうあまりいないと思うので、そっとしておけばよいと思う」など部落差別はもうない、問題がない程度になくなってきているという回答があった。

一方で「部落の人であると聞くと私はまだ抵抗があります」「部落の地域が近所にあるので怖い」「友人からはあの地区は治安が悪いと聞いたり、父親からその地区の職場に転勤になった時は危険手当がつくなど、今でも差別はなくなっていないんだなと思いました」「実家近くのかって部落とされていた地域には市営の団地があります。その地域の小学校は、児童の行いが悪く、少子化でその隣の小学校との統合の案が出された際に隣の小学校の親達が猛反対し統合の案が保留になったとの噂を耳にしました」「住むとなるとためらう。過去、同和地区に居たとき、品がなく、治安が悪いと親に聞いたからだ。こんな状態の人が多いのではないかと私は思う」「差別は良くないと頭では分かっているが、同和地区に住んだり、仕事をしたり、観光に行くことには抵抗がある。治安が悪かったり、事件に巻き込まれそうなイメージがある」など学生の中にも部落に対する根強い差別意識、忌避意識がある。

「部落差別はもうない」「問題ない程度になくなってきている」と考える学生や部落差別意識を持つ学生に、具体的な部落差別の現実と差別が許されない社会悪であること、こうした現実が解決していけるという展望をあわせて伝えていくことが重要である。

[8] 最も多かった差別解消へむけた回答

意識調査の自由記述の回答で最も多かったのは、差別解消にむけた積極的な意見であった。自由記述に回答した学生 588 人のうち積極的意見を回答したのは 149 人であった。

積極的意見の特徴の第一は、「部落問題は非常に難しい問題。まず部落問題について正しい理解をすることが重要だと思う」「まだまだ部落問題については無知なので勉強が必要だと思いました」「私は部落問題に関する知識がほとんど無く、無関心でした。そういった人が多くいると、差別の問題が無くなりにくくなってしまおうと反省しました。問題に対する正しい知識を持ち、いざ直面したときに正しい意見を言えるようにしようと思いました」「まだまだ部落問題については無知なので勉強が必要だと思いました」「差別を受けた人がどのような差別をされてきたのかをよく理解したいと思う」といった部落問題を正しく知りたい、理解したいという意見であった。

積極的意見の特徴の第二は、「自分は中学、高校で差別について学習したことから、様々なこと

を知ることができたので、学校教育でたくさん取り入れるべきだと思います」「小学生の頃から差別がよくないものであると教え込めば、皆差別反対意見を持つのではないだろうか」「部落を差別する人がマイノリティになるような意識を人々に持たせる内容の報道をメディアでくり返し流すと効果があるのではないかとアンケートに答えながら思った」「同和問題や差別問題に対しては、幅広い多くの人達に現在の状況を伝え、まずは認知してもらうことが大切だと思います」といった正しく教えるべきだ、正しい情報を発信するべきだという意見であった。

積極的意見の第三の特徴は、「同和問題はまだまだなくならないが、なくす努力を全員がするべきだと思う」「差別は、一人一人自身の行動で少なくなっていくと思う」「同和地区と周辺地域の交流を深め、協働してまちづくりを進めて欲しいと感じた」「孤立していると思うので、部落問題に関して真剣に考えている人が集まりグループを作り、政府に任せるのではなくそういうグループが取り組むべきだと思います」「差別をしたとこで誰も得をしないから今すぐにでも差別を統制する法律を作って差別について再び深く考えるべきである」といった差別をなくする努力をする、取り組みをする必要があるという意見であった。

その他にも「(部落差別は)絶対にあってはならない差別だと思う」「差別は絶対に許さない」「同和問題を中高の時に授業を受けて差別は許されるものではないと感じた」「住んでいる地域、出身地だけで差別をする意味がわかりません。絶対におかしいです。あってはならないことです」といった部落差別を否定する回答が多数あった。

[9] まとめ

意識調査の結果をふまえ、自由記述に回答した 588 人の意見の特徴を見てきたが、部落問題を「はじめて知った」という学生、「差別なんてもうない」という学生、差別はあるが、「みんな気にしていない」「そっとしておけばなくなる」という学生、「住むとなるとためらう」「同和地区に住んだり、仕事をしたり、観光に行くことは抵抗がある。治安が悪かったり、事件に巻き込まれそうなイメージがある」という学生など半世紀前に同和对策審議会答申が否定し解消をめざしてきた意識や課題が残念ながら根強く残っている。

しかし、自由記述の回答には否定的な意見を上回る多くの積極的意見があった。「部落問題を正しく勉強したい」「部落差別は間違っている」「部落差別をなくすべきだ」「取り組めば部落差別はなくなる」といった学生の意見をより広範な意見へ広げていくような人権問題学習の取り組みが求められる。